

心理的アプローチによる大学におけるベンチャー起業創成

大阪大学工学部

田中万里子、森勇介、吉村哲明、榊原明美、柴田久枝

NIMS コンファレンス プレゼンテーション、2003年3月19日

日本経済を活性化させ、経済的危機を乗り越えるために、現在の日本のビジネスの動向はベンチャーの起業創成を必要としている。ベンチャー起業創成のためには専門的な技術的な知識と同時に創造性が要求される。ここで問題となるのは現在の日本人に創造性が欠けているといわれていることである。子どもというものは自然に創造性をもっているものであることを考えると、人が創造性を欠くということは成長の過程において多種のトラウマを体験することからくるのではないかと我々研究員は仮定した。とくに日本人の場合、トラウマは子どもの発達過程で起こる衝撃的な体験の他に学校教育の様式や制度が引き起こすトラウマが考えられる。この研究でのべるトラウマとは広義なもので、個人の真の可能性の達成ははばむ総ての体験を意味する。このプロジェクトでは抑圧されてきた創造性の再活性化または回復を、POMR というプロジェクトリーダーの田中万里子によって開発された短期間にしかも革新的に人に変化をもたらす心理的なアプローチを用いて、図ろうとするものである。POMR では焦点が記憶の断片である体感にあてられ、そこからトラウマを体験した元の体験へつれもどし、その体験のリフレーミングを行うことがなされる。そのことによって情動記憶が変化させられる。この情動記憶が人に自分が行動したいようにすることをしばしば阻んでいるのである。POMR はさらにトラウマ体験の時に形成された自己概念、家族観、人生観などについてのビリーフシステムの修正をはかり、同類テーマの体験を脅迫的に繰り返すことを予防するのである。研究のプロジェクトが企画されたとき、トラウマ記憶(特に情動記憶)とビリーフシステムの修正を図れば、人が自己の創造性を、再び呼び目覚ますことや創造性を発揮するのに障害となっていたものを除外できると考えたのである。

方法論：

被験者は阪大の学生および教官、ベンチャービジネス関係者に公募して、一般的な研究目的を説明したあとにつのられ、研究対象グループとして40名が参加することとなった。研究対象者の年齢には巾があり20歳から57歳である。その40名をランダムに20名ずつ、2組に分け、A組みを被験者グループ、B組みをコントロールグループとした。研究開始の当初両グループとも20名のメンバーで形成されていたが、12月になって各両グループから1名のメンバーが個人的な理由で抜け、両グループとも19名のメンバーによって構成されることとなった。両グループのメンバーは全員、創造性に関するテストとしてS-A 創造性検査のA版と、EPPS 性格検査(Edwards Personal Preference Schedule), と研究グループが作成した質問表に被験者グループのPOMRセッションが6月に開始される前に答えても

らった。被験者グループは POMR セッションを 6 月に 2 回、10 月に 2 回、12 月に 2 回受けた。POMR セッションは 1 時間半の長さで、すべてのセッションは被験者の許可を得てビデオテープに録画された。これらのセッションは 3 人の POMR カウンセラーによって行われ、19 名の体験を均等にするために 2 セッションごとのローテーションを行った。被験者グループにはセッションを 2 度終了するごとにセッションに関するフィードバックとしての質問表に答えてもらった。12 月に被験者グループのすべてのセッションが終了した時点で被験者グループとコントロールグループには心理テストを受けてもらった。12 月には S-A 創造性検査 B 版、EPPS と質問表に答えてもらった。被験者グループとコントロールグループには 2003 年 5 月に再度心理テストを受けてもらう予定でいる。

中間段階におけるデーターの分析：

方法論で述べたように、我々は現在データーを集めている最中である。しかし 2 度にわたる S-A 創造性検査 A,B 版の結果を入手したので、予備的なデーターの分析をはかってみた。

S-A 創造性検査は次のような事項を 7 項目にわたって測定する：1) 応用力：ある物を他の目的で利用したり、応用する方法や利用目的を考える問題。日常の創意工夫する態度と関係深い発想力；2) 生産力：今あるものをもっと良いものにするため改善したり、改良する方法などを答える問題。問題発見力と関わり、改善改良思考と結びつく発想力；3) 空想力：実際には起きないようなことが起きたとき、どんなことになるかを空想して答える問題。予測、見通しなど日常的な課題と関係の深い発想力；4) 思考の早さ：発想のスムーズさ、流暢さを示す；5) 思考の広さ：内容のバラエティや多様性を示す；6) 思考の独自さ：発想のユニークさ非凡さを示す；7) 思考の深さ：発想のまとめの入念さや考えの深さを示す。

入手したデータは T-テストによって分析された。2002 年 6 月のデータの分析では被験者グループとコントロールグループの比較における有意差は統計的には見られなかった。しかしコントロールグループの 7 項目に関する平均値は思考の独自さに関して以外は被験者グループより高かった(Table 1, Graph 1) 2002 年 12 月のデーター分析も被験者グループとコントロールグループの比較における有意差は統計的には見られなかったが 12 月のデーターによれば被験者グループのほうがコントロールグループより 7 項目に関する平均値は高いことがわかった(Table 2, Graph 2)。後に紹介する被験者グループの被験前と被験後のデーターを考慮すれば、被験者グループのほうが、コントロールグループに比較して成長傾向にあると推測しても良いのではないと思われる。2003 年の 5 月のテストで被験者グループがさらに成長するか興味深いものである。

我々は被験者たちの被験前と被験後の創造性検査のデーター比較分析に有意な結果をみることができた (Table 3)。予想どおりコントロールグループのほうは 1 度目と 2 度目の創造性検査には有意差はみられなかった。被験者グループは次の事項に関して有意差を

見せた。1) 応用力($p<0.03$) ; 2) 生産力($p<0.03$) 4) 思考の早さ($p<0.01$) 7) 思考の深さ($p<0.05$)である。Graph 3 から Graph 6 に表示されたものがこのデータである。これらの結果は POMR セッションが被験者の創造性を再活性化させることに効果をあげたということを示していると理解できると思う。

創造性検査のデータ分析の他に我々は POMR の有効性を確認する 2 つの情報源を持つことができた。1 つは被験者が 2 セッションを終えるごとにフィードバックとして記入してくれた質問表である。それらの大半は肯定的なものであった。そのなかのいくつかのコメントを列挙してみると次のようなものになる。

「自分の思考のなかではすでにたいしたことではなくなっている過去の嫌な記憶が、実際には感情的に多大なマイナスの力となって働いていることを具体的な記憶を通じて理解させていただいたことはちょっと驚きだった。自分自身の中には「見えているけど処理できない部分」が存在するという事実を実感できたことに多く考えさせられた部分があった。」

「自分の価値観を人におしつけなくなりました。また、他人から価値観を押し付けられることもなくなりました。自分自身を大切に生きていけると思います。」

「6 回の面接とも本当に楽しかったです。話をするごとに、今までの自分がある可能性をつぶしていたことに気づき、そして、自分にはまだまだいろいろな可能性があることに気づいていくことがうれしかったです。またいろいろなこと、今回身に付けたことを表現していきたいと思います。」

「自分が昔体験した小さな出来事や行動が今の自分にこれほど関係し影響をおよぼしているとは考えもしませんでした。勝手に過去の自分が解釈しおもしろいことになってしまっていることがたくさんあることにも驚きました。考えのただしところは明確にし、悪影響をおよぼしているところは、しっかりなくしてくれるので、気持ちの整理がつきやすかったです。

6 回の面接で、これからの生き方が変わりそうな気がしました。」

「アグレッシブさが増した気がする。他のいろいろなことのせいでもあると思うが、自信もついた気がする。そして、そのことが周りに影響している様にも感じられて、うれしく思う。」

「自分自身が気づく変化としては、物事に対して能動的にアプローチすることが多くなった気がする。いままでは「・・・だから」という消極的、他の要因に依存して、ある行動をおこなったり選択することが、ほとんどであったが（同じ行動をとるにしても）能動的な選択ですることが増えたような気がする。」

「今まで不安に思っていたことが解消され、ベンチャー起業化に向け、活発になった。また自分では外交的になったと思う。」

2 つ目の情報源は直接的な被験者である研究者二人からの報告である。安達さんと松村さんは POMR のセッションを受けたことで自分たちの専門的な分野で成果があがったと報告され、このことを NIMS コンファレンスで紹介してよいという許可をされた。安達さんはこのプロジェクトに研究対象グループとして参加されることを決められたときには大学

院の博士課程2年目をむかえたところであった。彼は POMR のセッションを受けることにより、肯定的に物を考えられるようになったし、モチベーションを高めることができ、博士課程を3年の予定が2年で修了することができた。また自分の中に起きてくる直感思考を失敗を恐れることなく使えるようになり、その結果レーザー光線を使うことによってタンパクの結晶をつくることに成功した。さらに彼は自分の思考、機構、モチベーションが改善されたため、生産的になり8ヶ月の間に10個の論文をかいあげることができたと報告した。彼の成功はこれのみでなく、文部科学省からタンパクの結晶をもとにベンチャーを起業創成する助成金をもらうことができ、現在ベンチャー起業を計画中である。

松村さんは POMR セッションを受けて後積極性と革新的なアイデアに燃え安達さんのプログラムと組んで研究をはじめると決めた。このことで、ごくめずらしい、大学の学部間の共同プロジェクトを電気工学部と物質化学部をはじめることとなった。

まとめ：

全般的に見れば、POMR のセッションはほとんどの被験者の人達の創造性を再生させ、積極的にものごと取り組んでゆく姿勢をつくるのに効果的なようである。我々は POMR カウンセラーを育成するためと POMR のセッションを自分の創造性、肯定思考、積極性の活性化を希望する人達に提供できるための資金を得られることを強く望んでいる。研究対象者が大学生から社会人にいたるまで幅広く公募できたため、年齢、または専門的なポジションに関係なく人が POMR セッションから利益を受けることができることが明白となった。POMR が人のために有効になるにはそのセッションを受ける人が変化を望んでいるということが重要な必要要素であるように現時点では思われる。